港湾振興便り

2023. 10

第197号

＊：＊：＊：＊：＊：＊：＊＊：

目　　次

＊：＊：＊：＊：＊：＊：＊＊：

1　ポートエッセイ　　— 新幹線がモノだけを運ぶ —

～ 日本港湾振興団体連合会会長(新潟市長) 中原 八一 ～

2　トピック

●「ひょうご・おたる運河調査隊！2023」が開催されました！

（小樽市産業港湾部）

●函館港若松地区クルーズ船岸壁供用記念式典を開催しました

（函館市港湾空港部）

●「ザ・シンポジウムみなとin石狩湾新港」が開催されました

（ザ・シンポジウムみなと実行委員会事務局）

●「みなとオアシス和倉温泉」が新規登録されました

（北陸地方整備局　金沢港湾・空港整備事務所）

●第24回新潟技調講演会を開催しました

（北陸地方整備局　新潟港湾空港技術調査事務所）

＊：

1　ポートエッセイ　　―　新幹線がモノだけを運ぶ　―

～ 日本港湾振興団体連合会会長(新潟市長) 中原 八一 ～

＊：

記録的な猛暑だった今年の夏も過ぎ、秋の気配を感じるようになった。行動制限も解除されたこの夏は旅行、帰省と楽しんだ方も多かったのではないか。私の住む新潟市最大の旅客ターミナル新潟駅もお盆の帰省客等で賑わう様子が報道されていた。

新潟は新幹線で大都市東京と結ばれている。一番早い新幹線では1時間30分ほどで東京に到着する。通常でも乗車時間は2時間程度である。

先般、テレビ番組でこの新幹線で、人ではなくモノだけを運ぶ荷物輸送実験の様子が報道されていた。実験では、県産食品など約700箱が新潟から東京に運ばれた。その中には新潟のブランド枝豆「くろさき茶豆」があった。鮮度を保つため深夜に収穫され、新幹線で輸送、その日の午後にはスーパーの店頭で売られていた。それまでは県外の顧客にその日のうちに届ける方法は無く、生産者は新幹線輸送に期待を寄せる。

新幹線での輸送は鮮度が命の魚介類、青果、生花等のほか、揺れが少ないので揺れに弱い海産物や精密機器などの輸送にも向いているという。また、速さ、安定性にも優れており、JR東日本では今後も実験を繰り返し、2024年度以降の事業化を目指している。

2024年度と言えば、物流業界の大きな課題である2024年問題がある。時間外労働の制約から長距離の輸送や長時間の輸送が困難となり、2030年には3割ほどのモノが運べなくなるという。新幹線輸送が事業化されれば、2024年問題を解決する有効な選択肢の一つになるであろう。

また、新潟東港では、富山港、秋田港、北九州港に寄港する内航コンテナ航路が昨年から就航している。本航路は北九州港を経由して神戸港まで運び、北米、欧州と結ばれている。本年8月にはこの航路に国内最大クラスの内航コンテナ船が投入され、新潟東港では入港記念式典が催された。これは単に新潟港の利便性、サービスが高まったに留まらない。この2024年問題の対応策の一つとして、海上輸送はトラック輸送からの代替として機能する。地方港から主要港へのトラック輸送で長距離を運んでいた荷物を内航船で運ぶという選択肢が広がる。ドライバーは航路の両端側の運行をするだけであり、併せて業務の効率化も期待できる。

このようなトラック輸送から鉄道、海運へのシフトは、CO2排出量の削減にも効果的である。目の前に迫った2024年問題の対応策としてのモーダルシフトは同時に、環境破壊、気候変動等の課題克服への方策ともなりうる。まった無しの対応が迫られている。

＊：

２ トピック

＊：

●「ひょうご・おたる運河調査隊！２０２３」が開催されました！

（小樽市産業港湾部）

今夏、(公財)日本財団主催の「ひょうご・おたる運河調査隊！2023」が開催されました。

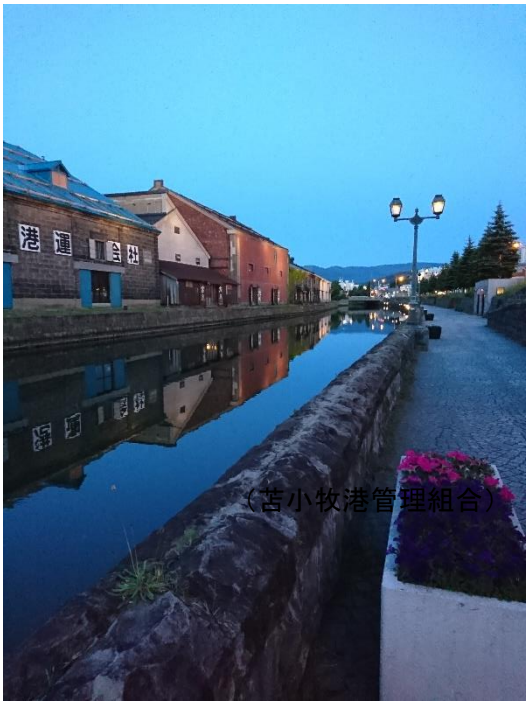
これは兵庫県と北海道の子ども達が、「運河と環境（保全）～発展の歴史と環境から運河の未来を探る～」をテーマに、神戸と小樽の二つの運河について歴史と文化を学びながら、環境保全の必要性と運河のまちの未来について考える機会を持つものです。

参加者は兵庫県と北海道から一般募集された総勢40名の小学5・6年生であり、いずれの都市でも2泊3日の宿泊研修を行い、専門家による講義を受けるとともにフィールドワークなどに取り組みました。

子ども達はこの間に友情を深め、忘れられない出会いと経験に恵まれたことと思います。

近年、地球環境への意識が高まる中、小樽港は海を体験し、楽しみ、学ぶことができる環境に恵まれていることが今回の取組から証明されました。今後、地球環境の再生という観点からも小樽運河が魅力ある観光資源となることを期待しています。

「ひょうご・おたる運河調査隊！2023」



（苫小牧港管理組合）

小樽運河

●函館港若松地区クルーズ船岸壁供用記念式典を開催しました

（函館市港湾空港部）

９月２７日（水）、北海道開発局函館開発建設部と函館市は函館港若松ふ頭ターミナル関係者駐車場にて「函館港若松地区クルーズ船岸壁供用記念式典」を開催しました。

函館港に入港する大型のクルーズ船は、これまで観光の中心地から6.5km離れた港町ふ頭を利用していましたが、本年3月に完成した若松地区のクルーズ船岸壁はJR函館駅からわずか300mに位置し、主要観光地への徒歩移動が可能となりました。観光消費とクルーズ船寄港数の更なる増加を期待しています。

本年の函館港へのクルーズ船寄港は49隻（過去最高、道内１位）を予定しており、新型コロナウイルス感染症拡大前の2019年の47隻の実績を上回るものとなります。

本事業では、ダイヤモンドプリンセスなどの11万トン級クルーズ船に対応した岸壁（水深10m、延長360m）を整備し、外国クルーズ船の受入体制の充実を図りました。

式典には、国会議員や函館市長ほか多数の関係者が参加され、遺愛女子中学校・高等学校の吹奏楽局の演奏、くす玉開披が執り行われ、供用開始を祝いました。

くす玉開披

式辞

●「ザ・シンポジウムみなとin石狩湾新港」が開催されました

（ザ・シンポジウムみなと実行委員会事務局）

令和５年１０月５日（木）、シャトレーゼガトーキングダムサッポロにて３１回目の「ザ・シンポジウムみなとin石狩湾新港」が開催されました。本シンポジウムは、北海道開発局など7者による実行委員会が主催し、「石狩湾新港の可能性と未来を語る」をテーマとして行いました。

第1部では（一社）寒地港湾空港技術研究センターの眞田理事長より、石狩湾新港の整備効果、石狩湾新港振興ビジョン、Team Sapporo-Hokkaidoの取組の説明がありました。

第2部の「講演」では、東京女子大学の二村真理子教授より、北海道内のトラックドライバー不足に対応するための物流効率化やモーダルシフトの重要性、洋上風力発電の集積とグリーン電力供給による環境価値向上についての講演がありました。続いて、(一社)海洋エネルギーセンターの渋谷正信理事より、洋上風力の石狩湾沖展開と水産業の協調的発展と題し、数多くの潜水調査の経験を踏まえた海洋構造物の漁礁化や藻場造成の事例、地域の水産業振興にもつながるアイデアについての講演がありました。

第3部の「パネルディスカッション」では、札幌商工会議所の紫藤正行副会頭、大和リース(株)北海道支店の稲垣仁志支店長、石狩湾新港管理組合の折谷徳弘専任副管理者、二村真理子教授、渋谷正信理事のパネリスト5名により、石狩湾新港地域と札幌圏の物流効率化、GX関連産業の企業誘致、港湾機能の高度化等をテーマに活発な意見が交わされました。

なお、本シンポジウムには、会場への参加者209名、Webライブ配信への参加者を合わせ合計約530名となる多数の参加がありました。

パネルディスカッションの様子

●「みなとオアシス和倉温泉」が新規登録されました

（北陸地方整備局　金沢港湾・空港整備事務所）

令和5年9月9日（土）、和倉港（石川県七尾市）に「みなとオアシス」（登録名称「みなとオアシス和倉温泉」）が新規に登録されました。（全国159箇所目、石川県内8箇所目）

同日、七尾市の湯っ足りパークにおいて登録証交付式が行われ、茶谷七尾市長に登録証が手交されました。市長は、「今回の登録により七尾港と和倉港の連携など、港を生かした取り組みを行ううえで、大きな弾みとなる。「海」・「みなと」を中心とした交流人口の拡大を推進していきたい」と挨拶されました。

「みなとオアシス和倉温泉」は、代表施設である「和倉温泉お祭り会館」のほか、「湯っ足りパーク」や「妻恋舟の湯」などの7施設から構成されています。構成施設には「和倉温泉運動公園　多目的グラウンド」や「和倉温泉運動公園　テニスコート」も含まれており、温泉文化とスポーツが融合した海辺空間を活用した賑わいづくりが期待されます。

みなとオアシス和倉温泉の詳細：https://www.pa.hrr.mlit.go.jp/file/57e1c5b7.pdf

茶谷七尾市長への登録証手交

和倉温泉お祭り会館（代表施設）

湯っ足りパーク（構成施設）

妻恋舟の湯（構成施設）

●「第２４回新潟技調講演会」を開催しました。

（北陸地方整備局　新潟港湾空港技術調査事務所）

令和５年９月２８日（木）、新潟市で「第２４回新潟技調講演会」を開催しました。

本講演会は、北陸の海・空のみなとづくりをわかりやすく伝え、市民や港湾関係者の皆様にみなとへの関心と理解を深めて頂くために毎年開催しており、今回は、当事務所長の挨拶の後、事務所報告として、「航路の水深確保と災害対応を行う作業船「白山」の機能」、「両津港の定期航路安定を目指した耐震改良設計」の２題について報告しました。

その後、特別講演として、尾畑酒造株式会社　尾畑留美子専務取締役より「佐渡島の循環を生む酒造り」と題して新潟と航路で繋がっている佐渡島での酒造りや、廃校を酒蔵として再生させた「学校蔵」との出会い、資源もヒトもエネルギーも循環させながら行う、これからの酒造りについてご講演頂きました。

今回も、多数の方（会場とオンライン含めて１９２名）に聴講頂き、盛況に開催することができました。

＊：＊：＊：本メールマガジンに関するお問合せやご意見、また情報の送り先 ：＊：＊：＊＊：＊：＊：
日本港湾振興団体連合会事務局
〒105-0002 港区愛宕１－３－４
TEL：03-5776-0630 FAX：03-5776-0631
e-mail：bcf06323@nifty.com
＊：